



『子どもたちの未来への責任』

理事 小森美登里

発行
NPO法人
ジェントルハートプロジェクト

事務局
〒210-0843
川崎市川崎区小田栄1-8-3 青山
Tel & Fax
045-845-3620(小森)
URL <http://npo-ghp.or.jp>

会員登録及びカンパは随時受付中
正会員 1口 2,000円
賛助会員 1口 1,000円
郵便振替
口座番号:00200-8-111295
口座名義:ジェントルハートプロジェクト
振込用紙に会員の種別を明記下さい



目次:

巻頭コラム	P 1
シンポジウムの報告から	P 2-3
石巻市立大川小学校訪問記	P 4-5
活動の報告と今後の予定	P 6-7
橋がかかる	P 8

ジェントルハート通信第45号
定価100円(会員は無料)

私は通信42号で教育委員会制度改革についての懸念を表明していました。

その記事を元に、国会質疑において私の主張を民意として文部科学大臣に届けてくださった国会議員の先生もいらっしゃいましたが、この6月に可決、成立してしまいました。実に現場の声が届きにくい国であると実感しています。

新しい制度では、教育行政の責任者を明確化するため、「新教育長」を首長が任命し、教育方針を教育委員会と話し合うという形になってしまいました。

首長に、この新教育長の任命権、罷免権があるとすれば、もし新教育長が問題を起こしたり、自殺事案等の重大事案が発生した時、任命権を問われるのは首長です。その重大事案発生時に任命責任者として新教育長の尻ぬぐいがきちんとできる首長は一体何人いるのでしょうか。それでも日本中の全ての首長がいじめと教育の専門家であれば良いのですが、その様な事はあり得ません。ですから、この分野の専門家でない人に大きな権限を持たせてしまうことになり、そこから新たなより大きな隠蔽が生まれる可能性があると考えられるのです。

その次の懸念は、首長にこの大きな権限を持った地方教育行政法のもと、道徳の教科化をいじめ問題と子どもの成長を口実にして実現させようとしていることです。いじめ問題と道徳の教科化は、そもそも全く別のものです。しかし、いじめ問題がクローズアップされる度にそれを利用して、教科化の必要性を強調してきたというのが実態でしょう。

まず、いじめ問題解決には、互いの違いを知り、その違いをそのまま認め合うことが重要です。それが出来た時、互いが成長し、いじめは解消されるのです。

しかし、国の検定を通った教科書を道徳で使えば、一定の方向性を生む可能性があります。少なくとも、一定の枠組みを作ってしまう可能性は大です。

人の考えや価値観に対して同じ方向を向かせてはならないですし、それがまして「国や学校や大人が考える正しいという方向」であってはならないのです。

大人は、子ども達の考えや思いを反映させながら、共に育ち合うべきです。

特に大人は、大人になるまでの間に大切なものを置き忘れてしまっています。それを子ども達は、共に学ぶ中で大人達に教えてくれるのです。

大人が作った道徳教科書で、大人が子どもを評価するというのは、考え方や感じ方に対して、正しいか正しくないかへの評価に繋がりますので、絶対にやるべきではない事であると考えます。

道徳の検定教科書を使うのは歴史からの反省がない愚かな行為であり、子どもが一番大切にすべき多様な価値観は育たなくなるのではないのでしょうか。

心の成長は誰にも評価出来ないものですし、してはならないものです。そもそも評価する教師の人格は誰が担保するのでしょうか。今だにいじめ問題を解決出来ていない教師に、検定教科書を持たせてはならないと思います。

このように「無免許道徳教師」が子どもに指導をし、評価までして良いはずがありません。教師に人の心の成長まで評価させる必要があるのでしょうか。

いまだに現場では、隠蔽、虚偽報告が横行しており、行政サイドに圧倒的な権力が存在しています。大人が事実に向き合う事もせず、子どもの死因を大人が勝手に変えている状況のまま、道徳が教科化されることは危険です。

学校を含む行政が行っている被害者に対する人権侵害を是正することなく、次のステップに進んではならないのです。

天国の子どもたちは、「やり返してはならない」と育てられ、「ゴメンね」と素直に言える子どもたちでした。この子どもたちをこの問題に利用しないでください。天国で泣いている子どもたちが大勢います。

子どもの環境は一人一人全て違うので、その育ちに合った成長の速度も寄り添い方も違います。心のサポートが必要な子どもに道徳を押し付けても解決はしないのです。

文化と、「人」を愛する心が子どもたちに育つことを心より願っています。

◆ 大川小学校被害者遺族からの報告 ◆

8月と11月の2回にわたって行われた『親の知る権利を求めるシンポジウム』において、石巻市立大川小学校の遺族である只野英明さんからの発表があった内容を、要約してご紹介します。第三者検証委員会の在り方を考えさせられる、たいへん貴重な体験報告をしていただきました。

私は大川小学校遺族の只野英昭です。大川小学校の津波被害で4人助かった児童の内の一人、只野哲也の父親です。

～ 中略 ～

私はあの光景、あの辛さを誰にも味わって欲しくないと思い、この大川小学校の事故の真相を明らかにし、二度と同じ悲劇を繰り返さないためにこれまで遺族で検証し続けてきました。

まず市教委の説明・調査が信用できなくなった理由の一つは、最初の頃の学校側、市教委側の説明は理解できないものだったということがあります。

山に逃げなかった理由を倒木があったからと説明していましたが、実際は津波による倒木があったものの地震による倒木はありませんでした。

生存児童が辿った避難ルートや時刻が、あとで目撃証言により嘘であったことが明らかになっています。

県教委に提出した死亡報告書には、死亡時刻を津波から40分後の3時25分頃と根拠なく書いていたという事実も、後にNHKの取材で3時35分まで子どもたちが校庭にいたことが生存者の証言から出てきた。ということがありました。

子どもたちへの聞き取り調査は、市教委が録音もせず、メモまで廃棄したので真相がわからない。自分の子どもがどんな様子で聞き取りされたかも分からないという状況でした。実際、息子の哲也の聞き取りもないまま市教委と担任の先生と本人だけで聞き取り調査をされたという事実がありました。

山に逃げようと言った子どもがいたという証言ですが、これは私の息子がずっと小さい頃から言っているのですが、聞き取りをした市教委の先生の『山に逃げようって子どもが言ったっていうのは、それって本当なの?』という質問に、本人は間違いなくその市教委の先生に『はい、そうです』と、答えきったのですが、これも無かったことにされています。)

第二回遺族説明会では、遺族に『山に逃げようという男子がいた』と説明した議事録も残っていません。校長への正式な聞き取り調査は2年後に行われるという偏った調査方法がずっと継続されてきています。

市教委の”人の記憶は変わるもの”という暴言、これは実は哲也の証言を全否定するものなんですけれども、これは今まで新聞・テレビ等で哲也が証言しているものを、記録として自分も持っているんですが、ずっと同じ事しか言っていません。

これをどうして全否定してくるのか?と、教育委員会、教職者として信じられない言動と感じております。

50分間避難行動をとらなかった理由を「倒木のため」とか「地域の住民の危機感が薄かったため」「ハザードマップで危険地域でなかったため」と、何よりも優先して「子どもたちの命を守るための意思決定」をしなければならなかった組織の学校で、何が起きていたかの分析をずっと曖昧なままにしてきました。

避難するための時間も方法も情報も全て揃っていたということもあります。

子どもたちが逃げたがっていたという事実とはとにかく認めない。子どもが一生懸命証言したことですら”人の記憶は変わるもの”というように、遺族としてだけでなく、生存児童の親としてもものすごく辛いんですけれども、あそこで全部を見た哲也の証言に対して目の前でこれを言われた時が一番辛かったです。

検証委員会設置の前に県教委・市教委・大川小・遺族の四者円卓会議があったんですが、その後検証委員会で起きてくる様々な問題は、この円卓会議が問題であったことが、改めてこの2回に及ぶ円卓会議の映像を繰り返し見ると、分かってきたという事実があります。

私は四者円卓会議に有識者を加えて円卓会議のまま検証したら良いのではないかとずっと思っていました。「避難行動をとらなかった50分間何をしていたかを検証して欲しい」と遺族はずっと訴えているのですが、津波工学の有識者は『いらない』と主張し『津波で起きた事故だから』という見当違いの理由で押し切られてこの検証委員会が立ち上げられたという経緯があります。

事務局の社会安全研究所の所長が第二回目の円卓会議に来て、検証人についての説明をしました。事務局がなぜ検証の中身を話すのかなとずっと疑問に思ってたんですが、事務局の立ち位置という事を本人首藤由紀所長が第2回円卓会議の場で、まるで本人が委員であるかのように検証のやり方

の話そのまま続けて話したという経緯があります。

結局遺族側からの要望は全て退けられ、遺族は同意をとるためだけに利用されました。

問題がありすぎる検証委員会。今回は発表時間が足りないので、抜粋で話します。

- ・議論が公開されたようには見えない

検証過程の公開は市議会で公開と決めた市民との約束であったはずだったが、一回目の検証委員会で室崎委員長がマスコミの撮影や中継はダメだと主張し、マスコミと揉めたという経緯がありました。

なぜ市議会で決めたことを委員会側が変えるのかな？とすごく疑問に思ったんですが、自分としては”非公開”という言葉が出てくると、どうしても”何か隠すんだろうな？”という風になってしまうので、その時点で”結局は調査委員会はダメなのか・・・”と自分ではそう思っています。

『非公開の場でないとしゃべれない』と言っていた委員もいましたが、私ははっきり言ってただの言い訳としか捉えていなくて、公開であれ非公開であれ検証の話としては気にすることは無いと思うのですが、そういう言い訳をして着々と検証は進められていきます。ですが『重要なことは全て公開の場で話した』と委員長は主張していましたが、これを果たして本当だったのかな？と思う部分があります。

遺族から見ると、マスコミの撮影を制限しただけでなく、ほとんどの議論はメールや非公開の会合で行われていて、何の資料を元にこの検証委員会は報告書をまとめたかというのは、全く私たち遺族には知らされていないと言う側面があります。

そうでなくても、遺族側で調べた検証資料など遺族側で持っている資料を提出したという経緯があったんですが、それも有効に活用されることはありませんでした。

調査委員の中で部外者に調査内容を漏洩した委員がいたという事実、これは紛れもない事実です。『傾斜の角度をパソコン上で計算して自慢げに見せてもらいました』と言う話を聞いた本人から私たちが直接話を聞きました。

次は最大の問題です。今回の検証委員会で、子どもたちへの聞き取り調査でのお願いは、円卓会議の段階からずっと私が話してきたことで『ストレスのかからないように聞き取って欲しい』とか色々話をしたわけですが、一方的な聞き取り調査を結局息子にされました。

検証委員会の中で津波工学の首藤伸夫委員のほうから”マスコミの前で証言させるな”と言わんば

かりの『子どもにしゃべらせるな』と言う言動を、息子はこの委員会の中で3回に及んで『自分は圧力をかけられた』とうけとっています。

委員会が始まって四ヶ月が経っても聞き取り調査が来なかった方で、昨年6月16日に息子と一緒に『協力します』という話をしたんですが、『最終段階で』と言う話で、最終的には10月になって、強行スケジュールで打合せはしたんですが、打合せと違う質問を並べ立てられたということがあります。

私は室崎委員長本人に聞き取りを要望して、哲也を証言させることによって他の子どもの負担を軽くしよう思っていたのが、逆に哲也が証言することで他の子どもに対してプレッシャーを与えてしまうといった説明を、なぜか事務局からされたという事実があります。

校庭での様子を聞き取るという話で打合せがされていたのですが、結局は学校の校庭にいた子どもたちと学校の先生の様子ではなくて、地域住民の様子ばかりを聞く偏った聞き取り調査が現状は行われました。

あとは事務局が、委員でもないのに、しつこく何度も聞き取りをするという逸脱行為を繰り返していたという事実があります。当初は会場の設営だけなどと言っていたにも関わらず、委員でもない事務局にそういうことをされました。

各回の検証委員会で、遺族報告会において遺族からの質問をする場があったのですが、なぜか委員会の事務局が我々遺族に答弁をしたという事実がずっとありました。

委員の参加しない事務局のみでの聞き取り調査が何回も行われていたという事実は、委員会自体が認めています。私からみれば『ならば委員はいらないんじゃないの』と思うんですけど・・・

この検証委員会でのコンサル自体が行った行動が、一方的すぎたのではなかったのかと思います。このように検証委員会で事務局が逸脱行為をして委員以外に仕事をする。

何のための有識者の委員会なのか私にはよく理解できません。

これだけ委員長自ら失敗したと言った検証委員会で、現在文科省で学校事故対応に関する調査研究有識者会議が行われているんですが、この問題であったと言われる事務局のメンバーが2人も入っていることが、私としてはあり得ないことだと思いますし、文科省はこのことをどう捉えてこの2人のメンバーを有識者会議に参加させているのかを疑わしく思っています。

『石巻市立大川小学校訪問記』

2014年8月24日(日)、仙台市青葉区でジェントルハートプロジェクト主催の「親の知る権利を求めるシンポジウム」が開催された。

今回のテーマは、「学校事件事故に関する第三者委員会のあり方を考える」で、東日本大震災の大津波でお子さんを亡くされた石巻市立大川小学校のご遺族にもパネリストとして参加していただいた。

大川小学校の事故について、私は発生直後から関心をもっていた。学校管理下で、全校児童108人のうち74人の死亡・行方不明者を出すという惨事がなぜ起きてしまったのか、学校の裏手に山があるにもかかわらず、なぜそこに避難しなかったのか、報道からは知ることのできない何かがあるのなら、現地に足を運んで自分の目で確認したいとかねてから思っていた。

空白の51分間、なぜ裏山に逃げなかったのか。本当に逃げられなかったのか。

8月23日(土)、翌日のシンポジウムの後半のパートで、パネルディスカッションのコーディネーターを務める予定だった私は、この機会に大川小学校へと向かうことにした。十分ではないにせよ、現地を訪れ少しでも情報を仕入れてから会に臨みたいと考えたからだ。事故直後、「小学校の裏山は倒木が多く急斜面であるために登れない状態」との報道もあった。しかしその後、「倒木はなく、子どもたちもいつも登っていた」との情報も入ってきていた。それも自分の目で確かめたかった。

石巻でレンタカーを借りる際に、大川小学校に行きたいと思っていることを告げた。カーナビに大川小学校のデータがあるか確認したかったからだ。レンタカー会社のスタッフは「だいたいようぶだ」と言ってくれたが、ナビゲーションシステムが導いたのは別の学校「石巻市立飯野川第一小学校」だった。「ナビのバグ？」と思ったが、そうではなかった。あとからわかったことだが、震災後、大川小学校が間借りした場所が飯野川第一小学校だったのだ。大川小学校は、すでに、大川小学校跡地になっていたのだった。



校舎の傍らではコスモスが揺れていた



新北上大橋に近い釜谷地区の住宅の名残はすでになかった。

ともかく大川小学校に行かなければならない。私が行きたい大川小学校は、北上川にかかる橋のそばにあり、校舎の背後に山を抱く学校なのだ。カバンに入れてあった池上正樹さんと加藤順子さんの共著『あのとき、大川小学校で何が起きたのか』をめくって、大川小学校付近の土地の名前を見つけ出し、「釜谷」とナビに打ち込み、再び車を走らせた。

やがて、見覚えのある橋にたどり着いた。新北上大橋だ。震災で橋桁の一部が流失したこの橋では、まだ工事が続き、一部が片側通行となっていた。そして、橋を渡り終え、左へ大きくカーブすると、書籍やWebで何度も見た大川小学校の校舎が目に見え始めた。

大川小学校は、避難場所として本当にふさわしかったのだろうか。

どこかの運動部の学生だろうか、先生と一緒に30名ほどの中学生が慰霊塔に合掌している。校舎の傍らではひまわりやコスモスが咲いている。

あの日、津波は誰も想像しなかったような勢いで川をさかのぼり、おそらくは轟音をとどろかせながらあらゆるものを破壊し尽くしたのだろう。釜谷地区の住居や商店はすべて破壊され流された。かろうじて大川小学校と診療所だけが、その痕跡を残しているに過ぎない。しかし、明るい日差しのもとで、私にはそのリアリティを感じ取ることができなかった。想像するには、あまりにも巨大なことが起きていたからだろうか。そこにはただ、静かな時間が流れていた。

大川小学校は避難場所となっていたという。果たして避難場所としてふさわしいところだったのだろうか。それを確かめるために、河口付近まで行ってみることにした。北上川と追波(おっぱ)湾の境界と思われる月浜まで車を進める。当日は大川小学校近くで重機が作業をしていて土ぼこりを盛大に立てていた。そのため小学校の位置を確認しやすい状態だった。大川小学校までの距離は5キロほどだろうか。距離はあるものの、

高低差はほとんどない。

追波湾の周辺はリアス式海岸に特徴的な地形であり、ここに津波が押し寄せてくれば、波は行く手を周囲の山に阻まれて、高さを増しながら北上川に集中し川をさかのぼることになる。そして川沿いには、わずかに平地が広がり、大川小学校もこの平地に位置する。

だとすれば、数十センチの津波ならいざ知らず、数メートル、さらにあの震災で発生した巨大津波に対して大川小学校が安全な位置にあったとは考えにくい。ましてや、北上川の堤防は十分に高いとはいえず、さらには、北上川の堤防と大川小学校とのあいだには、堤防もない富士川が流れている。実際、事故当時には、津波は富士川方向と新北上大橋側との両方から子どもたちを襲ったという。



下流対岸から見た大川小学校と裏山(画面左)。堤防がとても低いことがわかる。

裏山は、登れない斜度だったのか。

判断の遅れをごまかすための言い訳なのか。

再び大川小学校に戻り、今度は学校のまわりをいろいろな角度から見て回った。避難場所として、本当に裏山はあり得なかったのか。

子どもたちは、椎茸栽培の体験学習などで体育館脇の裏山によく登っていたという。そして、大川小学校長も趣味の写真を撮るために頻繁に裏山に登り、学校の撮影をしていたという。本当に危険なほどの、登るのが困難なほどの山道なのか。これは登って見なければわからない。

裏山の登り口には、石巻市によって「立ち入り禁止」の看板が立てられていた。立ち入りを禁止する理由がわからない。あえて理由を探すなら、山道がいかに平坦かを確認されないように立ち入り禁止にしている位のものだ。そこまで登られたくないのなら、登ってみよう。私は里山からアルプスまでいろいろの山を歩いている。最近ではずいぶん高齢の方との山歩きも楽しんでいる。そして確信した。この山道は、幼稚園生でも老人でも容易に登れる。

「山に逃げよう」といった子どもがいるという。その声に、教員が正常に反応できていたら、子どもたちの命は守られたはずだ。

仮に、市側が主張するように本当に山に倒木が多く、雪もあり、登れる状態でなかったとしても、あと15分早く行動を起こし、三角地帯方向に向かっていたら、そしてそのまま、より高い方へと舗装された道路を進んでいたとしたら、一人の命を失うこともなかったのではないだろうか。

多くの学校事故・事件と共通点の多い
大川小学校の事故。

この事故には色濃く人災の側面がある。そしてさらに、わが子に何があったのかを知りたいと願う親に対する、学校や教育委員会、あるいは自治体からの不誠実な対応という加害行為が、他の多くの学校事故・事件と同様に、行われている。

これまで、何度も訴えてきたことだが、事故・事件の発生を予防するには、不幸にしてすでに起きてしまった事故・事件を徹底的に検証し、そこから予防策を見いだしていかなければならないはずだ。

それなのに、大川小学校の事故においても、あらゆる調査・検証に対して不誠実な対応がなされている。石巻市の責任は大きいし、同時に調査委員会を主導したとする文部科学省の責任もまた大きい。

「大川小学校の校舎を残してほしい」と津波に襲われながらも奇跡的に助かった只野哲也君をはじめ5人の卒業生が、母校の校舎保存を訴えているという。子どもたちの思いに応える意味でも、子どもの命を軽んじてしまったすべての大人たちにとっての反省の碑としても、大川小学校をこの地に残していかなければならないと思う。



裏山への登り口、石巻市より立ち入り禁止の看板が立てられていた。

◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日付	主催者	都道府県	都市	人数
2014/10/1	川越少年刑務所	埼玉	川越	500
2014/10/7	下都賀地域アクションミーティング	栃木	栃木	200
2014/10/9	下関市立神玉学校	山口	下関	85
2014/10/10	周防大島町立大島中学校	山口	山口	110
2014/10/15	泉北地区人権教育講演会	大阪	泉	100
2014/10/20	真庭市立北房中学校	岡山	真庭	210
2014/10/21	美咲町立柵原西小学校	岡山	美咲	300
2014/10/23	山口市立鑄銭司小学校	山口	山口	150
2014/10/24	横浜弁護士会	神奈川	横浜	20
2014/10/28	津山市立鶴山中学校	岡山	津山	300
2014/10/31	津山市立勝加茂小学校	岡山	津山	30
2014/11/1	倉敷市立水島中学校	岡山	倉敷	300
2014/11/3	一橋大学 一橋祭	東京	国立	
2014/11/4	南魚沼市立城内中学校	新潟	南魚沼	260
2014/11/5	岡山少年院	岡山	岡山	65
2014/11/5	羽咋市立羽咋中学校	石川	羽咋	200
2014/11/5	上越市立東本町小学校「いじめを考える集い」(教員向)	新潟	上越	200
2014/11/6	上越市立東本町小学校「いじめを考える集い」	新潟	上越	130
2014/11/6	上越市立直江津東中学校	新潟	上越	220
2014/11/8	江東区青少年対策砂町地区委員会	東京	江東区	150
2014/11/10	大宮開成高等学校	埼玉	さいたま	600
2014/11/11	私立金沢高等学校	石川	金沢	1,260
2014/11/12	周南市立菊川中学校	山口	周南	240
2014/11/13	西宮市教育委員会いじめ対応ネットワーク会議	兵庫	西宮	100
2014/11/13	山口市立川西中学校	山口	山口	300
2014/11/15	山陽小野田市立高千帆中学校	山口	山陽小野田	760
2014/11/16	周南市立秋月中学校	山口	周南	260
2014/11/18	玉野市立日比小学校	岡山	玉野	150
2014/11/18	備前市立片上高等学校	岡山	備前	80
2014/11/19	大和郡山市立片桐中学校	奈良	大和郡山	340
2014/11/21	山口県立岩国総合高等学校	山口	岩国	300
2014/11/22	愛西市立佐織西中学校	愛知	愛西	560
2014/11/25	山口県立下関南高等学校	山口	下関	570
2014/11/26	かえつ有明中高等学校	東京	江東区	400
2014/11/27	横浜市立日野小学校	神奈川	横浜	340
2014/11/28	南房総教育事務所人権研修会	千葉	木更津	300
2014/11/28	小浜市立小浜第二中学校	福井	小浜	600
2014/11/29	国分寺市立第五中学校	東京	国分寺	530
2014/11/29	桜井市人権文化を育てる市民のつどい	奈良	桜井	200
2014/11/29	出水市いじめ問題を考える会	鹿児島	和泉	100
2017/12/2	柏市立大津ヶ丘中学校	千葉	柏	550
2014/12/3	藤沢市教育委員会	神奈川	藤沢	50
2014/12/4	瀬戸内市立牛窓中学校	岡山	瀬戸内	950
2014/12/4	備前市立佐伯中学校	岡山	備前	115

日付	主催者	都道府県	都市	人数
2014/12/4	酒々井市立酒々井中学校	千葉	酒々井	570
2014/12/4	羽島市立羽島中学校	岐阜	羽島	880
2014/12/5	総社市立総社東中学校	岡山	総社	170
2014/12/6	高知県『いじめ防止子どもサミット』	高知県	高知	410
2014/12/8	近江中学校区人権講演会	三重	松阪	80
2014/12/8	神奈川県立市ヶ尾高等学校	神奈川	横浜	830
2014/12/9	松阪市立近江中学校	三重	松阪	100
2014/12/10	八尾市立龍華小学校	大阪	八尾	400
2014/12/10	八尾市立龍華小学校(教員研修)	大阪	八尾	40
2014/12/11	横浜市立日野南小学校	神奈川	横浜	310
2014/12/12	柏市立高柳中学校	千葉	柏	660
2014/12/15	玉野市立東児中学校	岡山	玉野	120
2014/12/16	倉敷市立玉島北中学校	岡山	倉敷	710
2014/12/17	船橋市立行田西小学校	千葉	船橋	200
2014/12/19	横浜市立中田小学校	神奈川	横浜	820
2015/1/13	三条市立大島中学校	新潟	三条	95
2015/1/15	箕面市立第四中学校	大阪	箕面	700
2015/1/16	津山市立河辺小学校	岡山	津山	55
2015/1/18	横浜YMCA PINK SHIRT DAY	神奈川	横浜	160
2015/1/20	高島市立朽木東小学校	滋賀	高島	100
2015/1/21	霧島市立日当山中学校	鹿児島	霧島	410
2015/1/23	川崎市立久本小学校	神奈川	川崎	178
2015/1/27	川崎市立学校長研修会	神奈川	川崎	200
2015/1/28	甲府市立中道南小学校	山梨	甲府	90
2015/2/3	江東区教委放課後支援課	東京	江東区	30
2015/2/6	愛媛県中予地区人権啓発講座	愛媛	松山	100
2015/2/18	川崎市総合教育センター教員研修	神奈川	川崎	45
2015/2/25	光泉高等学校	滋賀	草津	370
2015/3/4	比叡山高等学校	滋賀	大津	80
2015/3/21	横浜市青少年指導員研修会	神奈川	横浜	800
2015/4/13	下関市立吉見中学校	山口	下関	170
2015/4/15	藤嶺学園藤沢中学校	神奈川	藤沢	150
2015/4/15	滋賀県立野洲高等学校	滋賀	野洲	610
2015/4/16	宇都宮文星女子高等学校	栃木	宇都宮	340
2015/5/20	国分寺市教育研究所	東京	国分寺	350



本当は、生きたかった。
 大好きなあの教室に戻りたかった。
 大人の力が、欲しかった。

遺族によって初めて明らかにされる、いじめ自殺の真実
 悲劇を繰り返さないために 教室で、家で、大人と子どもが
 一緒に いじめについて考えるきっかけになる本
 私は15歳。音楽と海が大好きで、明るい性格のどこにでもいる
 女の子。「優しいところが一番大切だよ」そんな言葉を託して、
 私は天国に行きました。

『遺書』 わたしが15歳でいじめ自殺をした理由
 小森美登里 著 定価 本体 600円＋税 ISBN 9784872907117



◇ 橋がかかる ◇ ひととひととの出会い、そこにかかる橋

ここは毎回ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由にお書き頂くコーナーです。今回は七里が丘こども若者支援研究所の滝田衛さんにお話ししました。

長いこと不登校や社会的ひきこもりのこども若者と歩んできた経験から、いじめと背中合わせにすこすこども若者の実態を、ぼくはたくさん見てきた。

4年前、神奈川県学校フリースクール等連携協議会(不登校支援)の席上、ぼくは会長として中学3年生篠原真矢さんの自死に言及した。

そして昨年5月、上記協議会の会長職を辞する時、不登校といじめにかかわる話をさせていただいた。大津(2011年10月11日)そして大阪(2012年12月22日)の中高校生の自死は、その背景にいじめ・体罰があったからだ。未来を生きるこども若者が、自らの手で命を絶つ。なんて切なくやるせない現実だ。

真矢さんの父親、篠原宏明さんのお話を聞く機会を昨年夏にいただいた。「いじめ防止対策推進法」の9月施行に向け、神奈川県新聞社が企画したのである。改めて篠原さんの語る言葉に「いじめを超える」真実を感じた。弱い子だとの偏見で「いじめ・自死」を葬ろうとする学校と社会に、真正面から受け止める大人の力を見せる篠原さんに、真矢さんが生き続けていることを実感した。自死を持っていじめを解決しようとする嘆きの底にある、生きたい、生きてほしいという願いを。いじめる人が、いじめを傍観する人が、そしていじめに取り組めない学校や社会が、ぼくを含めた大人が問題なのだ実感した。

いじめを受ける“あなた”の態度や性格が問題ではない。自分を責めないでほしい。この現代社会の在り様、「いじめられるあなたが悪い」「もっと強くなれ」等の社会圧が課題なのだ。いじめを受ける“あなた”は優しく平和的な人、“あなた”が大切にされる社会が願い、だから生きて欲しい。

ぼくは今、「仲良く」という結論を子どもに押し付けるのではなく、子どもには「自分を語れる人」になってほしいと思っている。大人が表面的に求める良い子を演じる子どもを、その場しのぎの素直でいい子を装うことをやめよう。人の目や気持ちを察して言葉を選ぶのではなく、自分の正直な気持ち、今心に描いている思いを言葉にしてほしいと思っている。子どもの喜びも悲しみも認められる学校や社会を願っている。そう、ありのままの自分をだ。しかし何を言ってもいいのではない。分かりやすく言えば、人を語るのではなく、自分を語ってほしい。自分の自由を大切にすると、人の自由を尊重することである。それでは何も言えなくなる！と言う声が聞こえてきそう。それは違う。具体的に言えば次のような発言をしていきたい。

『私は・・・と思う』 『僕は・・・が悲しい(苦しい)。』
『僕は〇〇さんの考えとは違う』 『私は〇〇さんと同じ意見だ。』
『私は・・・をしたい』 『僕は・・・がうまくできない。』

すなわち他人を馬鹿にし、さげすむことではない。わかりやすく言えば“いじめ”とはヘイトスピーチだ。差別なのだ。“いじめない”とは、人を語るのではなく自分を語ることなのだ。一人称の言葉を積み重ねること、『私は』『僕は』『自分は』と。恥ずかしければ『おいらは』『あたいは』『ミーは』と。

大人が偉そうにいじめの審判をする、それはおかしい。大人の経験は豊富だが、「いじめは人を成長させる」的な勝者の論理、必要悪との隘路に陥る。こどもと共に、子どもの声を、子どもと意見を交流しながら、一緒に考えることだ。国の「いじめ防止対策推進法」には大人のエラそうな視点が見え隠れする。ぜひ各自

治体で具体化される条例には、こどもと共にこの時代を切り開く具体策を盛り込んでほしい。学校や社会はこどもと共に歩む覚悟が問われている。そう、大人の覚悟が求められているのである。ぼくは、不登校と社会的ひきこもりの子ども・若者に寄り添うNPO事業の中で、ただ生きているだけでいいと強く願う日々を送ってきた。尊い命とは、何をなしたかではない。生きているだけで素晴らしいのだ。学校や社会がそういう場所であることが、尊い命を失ってきた過去から今に願う何よりの希望だ。命を紡ぐ、命が途切れてはいけない。過去の失った命から学び、この国が基調とする人権と平和、自由と平等を実現し追求するのが大人の使命だ。

義務教育9年、高校3年、計12年。その先に膨大な人生が待っている。いつの間にか、この12年の教育を肥大化させる現代となってしまった。残念だ。「一人の命は地球より重い」と言いながら、横並びの協調性と集団化で「一人の子どもの命を奪う」学校がある。学校で起こっていることを、家庭や親の責任とする学校がある。親の無念さが聞こえる。人権が保障されない差別と偏見の学校がある。この呪縛から学校を解き放つ、これがいじめをなくすことになる。

先生に伝えたい。先生自身が民主的人格を身につけ、法に基づく教育実践をすることを。子どもの最善を実現するために、教育実践を教員同士が検証し、先輩教師の財産に習い、成功事例を教育実践に組み込むことを。何よりも子どもから学び、子どもが発する「なぜ」「どうして」に耳を傾けることを願う。そして学校と教師の実践が法に合致しているかを問い続け、常に実践し“反省的教師(東京大学名誉教授:佐藤学氏)”であり続けることを期待したい。

ぼくは次のことを大人たちに願い、実践してほしいと思う。

1. 大人の言動が、法にある教育権と人権尊重に合致しているか
2. 子どもの言動が、法にある自由と平等に基づいているか
3. 学校の校則や取り決めが、子どもの人権保障をしているか
4. 子どもの最善が、学校の教室や授業で実現しているか
5. 学校の公開性、子どもや親そして地域の参加が実現しているか

いじめを自死で告発しはじめた1980年代。不登校の子どもが学校を問いはじめた1990年代。しかし21世紀に入ってもいじめも不登校も解決していない。

高校進学率97%を越え高卒資格がライフラインになった現在だが、その先に高校不登校そして中退がある。専門学校・大学・大学院にも不登校中退があり、社会的ひきこもり70万人(親和性150万人 内閣府2010年)、非正規労働者1,721万人(2009年厚労省)の社会が存在する。子ども若者の社会参加が閉ざされ人生をあきらめる社会がある。フリースクール・サポート校・定時通信制・高校卒業程度認定試験が救済するが、この支援は補助的に過ぎない。教育は学校にあるのではなく市民社会の中にこそある。そこが解決の場となるのだ。

この瞬間、いじめに悩み未来を失う子がいる。一方で健気に生きる子どもがいる。子どもの最善を願う大人として、ぼくは子どもにまなざしをむけ続ける。

滝田 衛

七里ヶ丘こども若者支援研究所主宰

NPO法人アンガージュマン・よこすか理事 臨床発達心理士